

2-4. 徳之島における文化・自然遺産の分野横断型調査

人文学科多元地域文化コース 石田智子

はじめに

徳之島における文化遺産の現状調査を2020（令和2）年度に実施した（石田2021）。前年度の調査を踏まえて、これまで奄美大島や加計呂麻島で行ってきた調査（石田2017；石田・兼城2019・2020；渡辺・石田2018）を継続する形で、2021（令和3）年度は天城町を中心に戦争関連遺跡の踏査や戦争体験者への聞き取り調査を行った。徳之島はアジア太平洋戦争末期に重要な役割を果たした島である（天城町役場1978；浅間集落誌編纂委員会編2006；天城町戦後70周年記念誌編集委員会2016；益田2019；天城町教育委員会2020）。1943（昭和18）～1944（昭和19）年にかけて島民を徴用して突貫工事で浅間に飛行場を建設し、沖縄防衛戦の最前線基地として特別攻撃隊（特攻隊）の中継基地に利用された。また、戦局の急変により、1944年には徳之島全体に駐屯部隊が配置された。そのため、島には戦争の痕跡が今も数多く残るが、あまり認識されていないのが現状である。

世界自然遺産に登録されて徳之島への関心が高まり、豊かな自然環境や独特な文化・民俗が注目される一方で、徳之島の近現代の歴史が語られることは少ない。そこで、今年度の調査では、徳之島の先史時代から近現代にわたる長期間の歴史について理解を深めるとともに、文化・自然遺産の現状と課題について検討することを目的として、徳之島で現地調査を実施した。本稿では調査成果を報告する。

1. 事前準備(合同ゼミ)

今年度の調査は、考古学ゼミおよび文化人類学ゼミのそれぞれで参加希望の学生を募り、授業時間外に合同ゼミを開催した。調査の実施にあたっては、文化人類学を専門とする兼城糸絵准教授（法文学部）・中谷純江教授（グローバルセンター）、日本史・社会科教育を専門とする佐藤宏之准教授（教育学部）から指導を賜った。

第1回合同ゼミは2021年8月4日に対面形式で実施した。全員で顔合わせをした後、まず石田から調査概要とスケジュールを説明した。次に、聞き取り調査の実施方法や質問項目について全員で議論した。また、徳之島の文化・自然遺産の事前調査の分担を決めた（図1）。事前調査の結果は「旅のしおり」としてまとめ、現地調査の補助資料にした。

第2回合同ゼミは2021年9月13日にオンライン形式で実施した。



図1 第1回合同ゼミ

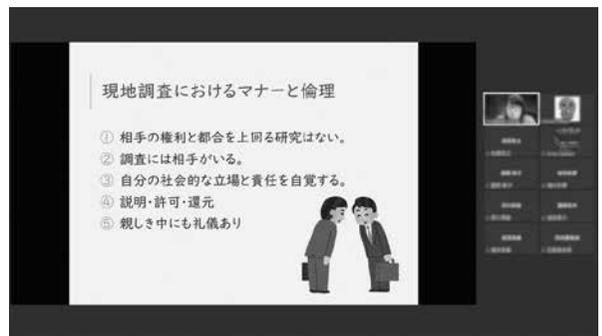


図2 第2回合同ゼミ

兼城准教授から「現地調査のコツと注意点」の説明をうけ、聞き取り調査にあたっての心構えを全員で共有した(図2)。聞き取り調査の実施方法や質問項目について、引き続き検討した。なお、当初は9月27～29日の日程で現地調査を実施予定であったが、鹿児島県で発令されたまん延防止等重点措置および鹿児島大学法文学部の授業実施方針を鑑み、9月上旬に調査の延期を決めた。そのため、聞き取り調査の準備を進める時間を確保することができた。

第3回合同ゼミは2021年10月27日にオンライン形式で実施した。まず石田から新たな調査スケジュールを説明した。次に、「天城町の戦時下の暮らし」のテーマで戦争前後の日常生活の変化に焦点をあてて聞き取り調査を進めることを決め、具体的な質問項目について検討した。なお、調査スケジュールを変更した結果、他の授業や学務との兼ね合い、新型コロナウイルス感染症の影響を考慮して、学生2名および教員1名の現地調査への参加が難しくなった。

2. 現地調査の概要

調査地域：徳之島一円（鹿児島県大島郡天城町・伊仙町・徳之島町）

調査期間：2021（令和3）年11月12日（金）～14日（日）[3日間]

調査参加者：澄田豪大・宮川真聖（法文学部人文学科2年生）、藤野真子（同3年生）、福村未夢（同4年生）、石田智子・兼城糸絵（法文学部教員）、中谷純江（グローバルセンター教員）

調査行程（図3）：

[調査1日目] 2021（令和3）年11月12日（金）

- 10:30 鹿児島空港集合
- 11:45 鹿児島空港出発
- 12:50 徳之島空港到着
- 13:00 天城町立ユイの館（展示見学）
[展示施設1]
- 14:00 聞き取り調査準備
- 15:00 聞き取り調査開始
- 17:00 聞き取り調査終了、片付け
- 17:30 宿泊先到着
- 18:30 夕食

[調査2日目] 2021（令和3）年11月13日（土）

- 9:00 宿泊先出発
踏査（陸軍浅間飛行場跡・特攻平和慰霊碑・護岸（堤防）・掩体壕 [調査地点②]、犬田布岬・戦艦大和慰霊塔 [調査地点⑤]）
- 11:30 昼食
- 13:00 カムイヤキの森 [調査地点⑦]
- 15:20 伊仙町立歴史民俗資料館 [展示施設2]
- 16:00 面縄貝塚 [調査地点⑧]

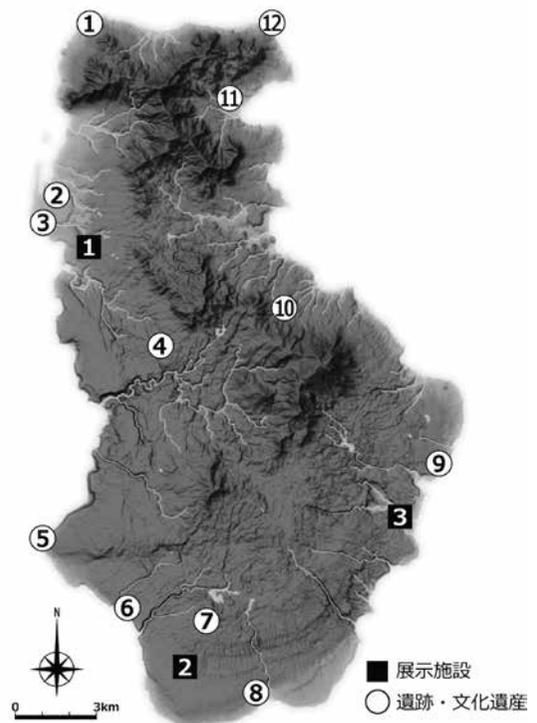


図3 調査地点

16:30 鹿浦小学校の旧奉安殿 [調査地点⑥]

18:00 夕食

[調査3日目] 2021 (令和3) 年11月14日 (日)

9:00 宿泊先出発

踏査 (ウンブキ (湾屋洞窟) [調査地点③]、ムシロ瀬 [調査地点①]、金見崎展望台 [調査地点⑫])

11:00 昼食

12:00 踏査 (旧山尋常高等小学校 [調査地点⑪]、トゥール墓・母間の線刻画 [調査地点⑩])

13:30 徳之島町郷土資料館 [展示施設3]

14:50 富山丸慰霊碑 [調査地点⑨]

15:40 踏査 (鬼塚街道、東又泉) [調査地点④]

17:55 徳之島空港出発

19:00 鹿兒島空港到着・解散

3. 調査内容

(1) 戦争体験の聞き取り調査

調査1日目に、戦争体験の聞き取り調査を天城町立ユイの館で実施した (図4)。ユイの館に到着して、まず展示を見学した。その後、聞き取り調査の打ち合わせを行い、調査時の役割分担 (進行、質問、あいづち、メモ) や質問内容を確認した。基本的に質問はすべて学生が行い、教員は進行や時間管理を担当した。スケジュールの関係で、徳之島に到着直後に聞き取り調査を実施することになったため、学生たちはかなり緊張している様子であった。

今回の調査では、天城町教育委員会の紹介で、天城町在住の2名のインフォーマント (90代男性のS氏、80代男性のO氏) にお話をうかがい、1名 (70代男性のM氏) に調査の補助をお願いした。アジア太平洋戦争当時は少年～青年期の方であり、学校生活、飛行場建設の手伝い、戦時中の食糧事情、空襲や被害の状況、徳之島の部隊、朝鮮人軍夫や慰安婦との関係、戦後の武装解除、米兵との交流、アメリカ統治下の生活、戦後の遊びなどの多岐にわたるお話をしてくださった。特に浅間には飛行場が建設されたため、工事に子どもたちも動員されたこと、周辺の島からきた人も小学校で寝泊まりして工事に従事したこと、沖縄に向かう飛行機を毎日のように拍手して見送ったこと、飛行場があったからこそ空襲も激しかったことなど、当地ならではの体験をうかがうことができた。

調査は当初は1時間の予定だったが、結果的には2時間にもわたって天城町における戦争前後の貴重なお話をうかがうことができた。O氏が執筆された貴重な資料も頂戴した。戦争体験者とはいえ年代が少し違うだけで知っていることも異なるけれども誰もが同じように戦争を体験したこと、今書き残しておかないと死んだらもう分からなくなってしまうこと、戦争は人格を変えて人間でなくしてしまうからこそ二度と戦争をして



図4 聞き取り調査

はいけないことを若い人たちに伝えたいという強い思いが熱心に話して下さった根底にある。M氏によると、ユイの館では「戦争を語る会」を毎年一回実施していたが、話者の高齢化や新型コロナウイルス感染症の問題で、昨年度から「語る会」は中止されたそうである。状況が大きく変化する中で、現在そしてこれからのわたしたちにできることを引き続き検討していきたい。

(2) 戦争関連遺跡の踏査

調査2日目は徳之島の南部・西部を中心に踏査した。まず徳之島空港周辺に残るアジア太平洋戦争に関わる場所を訪れた。現在の徳之島空港の滑走路と並行する直線道路の「平和通り」は、アジア太平洋戦争末期に建設された陸軍浅間飛行場の滑走路跡である(図5)。周辺には、特攻平和慰霊碑、護岸(堤防)、掩体壕も残っている。前日の聞き取り調査で話題に出てきた現場であり、当時の状況をイメージしながら見学することができた。南下して犬田布岬に移動し、戦艦大和慰霊塔を見学した。また、展望台からは地形や地質を観察した。昼食では徳之島の郷土料理を楽しんだ(図6)。

午後は「カムイヤキの森」のエコツアーに参加した。「カムイヤキの森」は徳之島の自然と歴史と文化を複合的に体感できる場所である。今回はエコツアーガイドの常加奈子さんに案内をお願いした。「カムイヤキの森」には国指定史跡のカムイヤキ古窯跡群がある。窯跡の近くまで行き、窯が構築される立地や地形、なぜこの場所で中世に大規模な陶器生産が行われたかについて考えることができた(図7)。また、「カムイヤキの森」の中には、アジア太平洋戦争時に旧日本軍が掘った塹壕が無数に残っており、一部はエコツアーのコースとして活用されている(図8)。「カムイヤキの森」のエリアは照葉樹の国有林で自然豊かな場所であり、地域の人びとの自然に対する認識や植物利用方法についても知る事ができた(図9)。ガイドの常さんからは、エコツアーガイドを務める際の工夫、世界自然遺産登録前後の変化などについてもお話をうかがった。

エコツアー終了後に伊仙町歴史民俗資料館を見学した。カムイヤキ古窯跡群の発掘調査で出土した多数の遺物が展示されている。特に、焼成時に失敗して融着や破裂したり、歪んだりした資料は通常見ることが少ないため、生産遺跡ならではの資料として関心を示した(図10)。近くの面縄貝塚を訪問した後に、



図5 浅間飛行場跡



図6 昼食(調査2日目)



図7 カムイヤキの森（薫跡）



図8 カムイヤキの森（塹壕通り）



図9 カムイヤキの森（植物）



図10 伊仙町歴史民俗資料館

有形文化財に登録されている鹿浦小学校の旧奉安殿を見学した（図11）。奉安殿の役割を説明した後に現物を見ると、非常にしっかりとしたつくりで驚くとともに、外壁に残る機銃掃射の痕跡からまさにここで戦争があったことを実感したようである。

調査3日目は徳之島の北部・東部を中心に踏査した。水中鍾乳洞のウンブキ（図12）や花崗岩が広がるムシロ瀬（図13）では、徳之島の特徴的な地形や地質を知るとともに、迫力ある雄大な景観を楽しんだ。続いて、徳之島の北東端にあたる金見崎展望台を訪れた。展望台に行く道はソテツのトンネルである（図14）。奄美群島においてソテツは非常に重要な植物であるが、身近に接する機会は少ない。ソテツの実を見ながら、戦時中に食したナリガユ（ソテツのおかゆ）について話した。展望台からは加計呂麻島・与路島・請島が見え、島の位置関係を確認した（図15）。昼食では地元産イノシシを使った郷土料理を堪能した（図16）。



図11 鹿浦小学校の旧奉安殿



図12 ウンブキ



図13 ムシロ瀬



図14 ソテツトンネル



図15 金見崎展望台



図16 昼食(調査3日目)



図17 旧山尋常高等小学校校舎



図18 母間の線刻画



図19 富山丸慰霊塔

午後は東海岸を南下した。2021年に有形文化財に登録された旧山尋常高等小学校校舎は1929年に建てられた鉄筋コンクリート造りの学校施設（島内最古）であり、戦時には旧日本陸軍の兵舎としても使用された（図17）。外壁には機銃掃射による弾痕を補修した跡が残り、建物前には戦時中に使用したと考えられる鉄鍋が置かれている。さらに南下し、母間の線刻画とトゥール墓を見学した（図18）。徳之島町立郷土資料館を見学した後、富山丸慰霊塔を訪れた（図19）。

その後、戦時中に独立混成第22連隊（鬼塚義淳連隊長）が本部を置いた当部集落に向かった。軍用道路として建設された道路は鬼塚街道（図20）として残っており、戦後も集落の基幹道路として大きな役割を果たした。当部集落には、戦時中に鬼塚部隊が生活用水として利用した東又泉（アガリマタイジュン）もある。戦争に関わる資料や場所が身近なところに残っている事実を認識した。



図20 鬼塚街道

4. 調査成果の報告作成(合同ゼミ)

第4回合同ゼミは2021年12月1日に対面形式で実施した。今回の調査成果はポスターにまとめて現地の展示施設で掲示する予定である。ポスター作成にあたっての事前準備として、まず聞き取り調査で得たデータの整理にとりかかった。今回は情報整理アプリのDendoronを利用した（図21）。カード単位で情報を整理し、オンラインでデータ内容を相互確認できるツールである。Dendoronの利用方法を兼城准教授が説明した。次に、ポスターのテーマ、全体の構成、掲載する内容について議論し、ポスター作成の方針を話し合った。また、聞き取り調査の協力者へのお礼状を作成した。

ポスターの作成にむけて、2021年12月28日に考古学ゼミ生を中心に集まり、画像編集ソフト（Adobe Photoshop、Illustrator）の操作を練習した。さらに、ポスターの構成要素の具体的検討および役割分担をした。



図 21 Dendoron の編集画面

また、文化財専門職に関する講演会を2022年1月5日に鹿児島大学で開催し、中尾綾那さん（天城町教育委員会）に「文化財専門職の仕事～大学での学びと文化財保護行政～」と題してお話いただいた（図22）。中尾さんは考古学ゼミ卒業生であり、今回の現地調査の実施にあたって多大な協力を受けている。文化財にかかわる職業に就くことを目指す学生にとって、多岐にわたる仕事の実際と楽しさを現役職員から直接話を聞く機会は貴重であり、質疑応答も活発に行われた。

第5回合同ゼミは2022年1月19日にオンライン形式で実施した。学生が協力して作成したポスター原案を基に、ポスター全体のレイアウト、各項目の内容、追加修正事項について、全員で議論した。

作成したポスター（図23）は、天城町立ユイの館の常設展示室で掲示予定である。



図 22 講演会



少年たちがみた天城の戦争



調査目的

戦争末期に重要な役割を果たした徳之島。戦争が徳之島にもたらした影響について鹿児島大学生が調査しました。

戦争体験を記録し、次世代に継承することを目的として、徳之島の戦争関連遺跡をめぐる、戦争体験者から当時のお話を聞きました。

調査概要

調査期間：2021年11月12日～14日
 調査参加者：
 鹿児島大学法文学部人文学科
 考古学・文化人類学ゼミ 6名
 鹿児島大学グローバルセンター 1名
 調査方法：現地踏査、聞き取り調査

戦跡踏査

徳之島一円に残る戦跡。自分の目で見てほしい。

★大和城山麓に専攻守備隊の独立重砲隊が、周囲の司令部を覆われ、一帯に多くの軍事施設が構築された。山頂には今も戦艦司令部が残る。



①陸軍浅間飛行場跡
 滑走路は現在の「平和通り」。特攻隊も出撃し、道路北端に特攻平和慰霊碑がある。周辺には飛行機を格納した機庫跡が残る。



②戦艦大和砲臺塔
 超巨大砲を眺める大田市市街に建てられた砲臺塔。沖縄に向かう途中、米軍の攻撃でこの砲臺は沖合に沈没したとされる(元乗組員の証言)。



③鹿浦小学校の旧奉安殿
 小学校裏手の高台にある。当時は教育勸励。現在はタイムカプセルを収納。外壁に機銃掃射の弾痕が残る。有形文化財に登録(2007年)。



④旧日本軍の塹壕
 カミイヤキの森には旧日本軍が掘った大小さまざまな塹壕が数多く残る。一部はエコースターのコースとして活用(塹壕通り)。



⑤富山丸砲臺塔
 戦時中の1944年6月29日に鳥徳沖で米艦隊により撃沈された輸送船「富山丸」の砲臺塔。現在も慰霊祭を毎年実施。



⑥島田尋常高等小学校校舎
 島内最古の鉄筋コンクリート建造物。外壁には機銃掃射の弾痕。建物前には鉄砲が残る。有形文化財に登録(2021年)。

聞き取り



天城町在住の皆さまにお話をうかがいました。



浅間飛行場跡

空襲

徳之島には約16000人の兵隊がいた(地元出身は300人)。大和城の井上部隊に8000人。重砲部隊に5000人。浅間飛行場に2500人。

空襲は子どもの頃に3、4回あり。山中に隠れた。8歳(1944年)になると増えた。戦闘機が飛んできた時、2機編隊は米軍、3機編隊は日本軍と判断した。浅間の空襲が特にひどかった。弾が斜めに飛んでくるから、防空壕に隠れたのに亡くなった人もいた。ある女性が空襲で逃げ回った。背負った子に乳を飲ませようと手を伸ばすと反応がなかった(爆弾の破片で肌着に小さな穴が開いていた)。爆弾があたって内臓が飛び出し、「殺してくれ」と苦しむ人もいた。



ぼくたちが飛行場をつくった

7歳(1943年)の頃、浅間の飛行場建設を手伝った。学校単位で週一回イモを持っていき、一日中働いた。モッコや馬車で多量の土砂を運んだ。全部入り。

徳之島内だけでなく沖永良部島からも多くの人が集められ、学校で寝泊まりしていた。空襲で滑走路が壊されたたびに、留で平らにしたよ。

水がないから風呂にも入れず、洗濯もできない。ノミやシラミで顔臉もままならない。でも、「日本のためだ」と思って我慢して働いたね。

戦時下の暮らし

とにかく空襲。時期を外すと農作業ができないから、空襲がひどくて1945年は田畑までできなかった。男性が兵隊にとられるから働き手がいなくて、祖父が月夜にイモを植えたけど、収穫まで時間がかかる。サトウキビは虫食いは食用禁止。だからソテツの実を食べた。水にさらして毒を抜いて食べるけどまずい。ソテツの木の芯はもつまずい。栄養ないけど、これを食べるしかなかったよ。「方言を使うな」と言われた。友人同士でわざと喋らせて、一日中方言を下げることがあったね。鳥を出ると方言が通じずに笑われるから劣等感があった。必ずしも上からの押し付けというわけではなく、教育的にはよかったのかもね。

米兵への思い

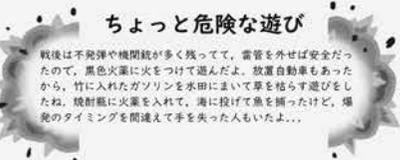
空襲でお尻の肉を吹き飛ばされた女性は、米兵をどう思うか聞くと「相手が見えないからね...」と話していたよ。天から降ってきた爆弾にやられたという認識で、米兵が憎いという感情はなかったようだね。

戦後に会った米兵の目が青くて、にらみつけられているようで怖かった。米兵は1人ずつ拳銃を持っていたからね。女性はなおさら怖かったらう。アメリカの飛行機が着陸して、子どもが30人くらい集まった。米兵が拳銃を取り出したから逃げたけど、実はカメラ(引き金をひいて撮影)だったよ。

戦後の変化

9月22日に米軍の船がきて、23日に武原病院の瘡で高田司令官が降伏文書に署名した。武装解除でやってきた米軍の船は日本の3倍の大きさで、アルドラーの地ならしの後に水陸両用戦車も上が上陸した。爆弾を積んで島の奥に繰り返し運んだ。日本兵が武器・弾薬を運ぶ姿を見るのはとても悲しかったね。二度とあってはならないと思ったし、戦っても勝てない現実を思い知ったよ。

1946年1月29日にアメリカになった。本土に自由に行けなくなった。8年間自分たちは「浪浪の民」だった。アメリカでも日本人でもなかった。



ちょっと危険な遊び

戦後是不発弾や機銃弾が多く残って、雷管を外せば安全だったので、黒色火薬に火をつけて遊んだよ。放置自動車もあったから、竹に入れたガソリンを水田にまいて草を枯らす遊びをしたね。機銃弾に火薬を入れて、溝に投げた魚を焼いたけど、爆発のタイミングを間違えて手を失った人もいたよ...

まとめ

調査を終えて...

これまでも戦争の話聞く機会がありましたが、情報が削ぎ落されて「きれい」になった話が多いように思います。遺かれる前の原石のような、それぞれの生々しい記憶に今回は触れることができました。

大筋的な視点から戦争を学ぶことも必要ですが、戦争を通して感じたことを個人レベルで聞くことが大切です。なぜなら、戦争で実際に戦うのは一人ひとりの人間であり、そのすべてに人生があったからです。

戦争への知識を持っているつもりでしたが、直接お話を聞くことで、自分が実際に体験していない戦争に関する記憶を調査する難しさを感じました。今のうちに行えるだけ、もっとお話を聞きたいです。

今まで教科書や本でしか知ることのできなかった戦争。今回の調査では、当時の状況に加え、戦争に対する感情も聞くことで、戦争を自分事として捉えられました。自分の目で見て、耳で聞くことの大切さを、改めて理解しました。

これからも調査を続けます。よろしくお祈りします。

本調査は、鹿児島大学法文学部の令和3年度事業「世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローバル教育研究拠点の形成」の助成で実施しました。本調査の実施にあたり、聞き取り調査にご協力いただいた皆様や天城町教育委員会をはじめとする多くの方にご協力いただきました。米軍ながら記して感謝申し上げます。徳之島の戦争に関する情報や資料をお持ちの方や、ポスター内容についてご意見がございましたら、下記にご連絡をお願いします。
 【お問い合わせ先】鹿児島大学法文学部人文学科 調査員 石田智子(考古学) 連絡先 (E-mail) iishida@leh.kagoshima-u.ac.jp

図23 ポスター

5. 調査参加学生の意見

①戦争にかかわる記憶を調査することについて、今回の調査を経て考えたことを述べてください。

戦争にかかわる記憶を調査することについて、今回の調査を経て考えたことは、これまでの戦争にかかわる記憶を聴く機会というのはテレビなどであったりして、そこで話をしているような人は、根底に戦争は二度としてはならないという考えがあり、その考えを発信していくために何度も講演を重ねている人だという印象だった。しかし、このような人の話はいい意味でも悪い意味でも「きれいな」になってしまっているように感じる。例えば今回の調査であった「青い目が怖かった。」という記憶は戦争を二度と起こしてはならないという考えとは直接結びつくものではないため、何度も話していくうちに削ぎ落されてしまうものではないかと考えられる。磨かれる前の原石に触れる事こそ戦争にかかわる記憶を調査する意義があると考え。／今回の調査を通して特に感じたことは、生の声を聞くことの大切さである。確かに、現在戦争の話を書く方法には様々なものがあり、これまで習ってきた学校教育や本、歴史番組、また今では youtube などインターネットを用いたメディアでも見ることができ、多くの情報を手軽に得ることができる時代になった。しかし、こうした方法で得られる情報は、大局的な視点から戦争をとらえたものであり、「日本が戦争に負けた」といったように、歴史の大きな流れを追ったものであることが多い。もちろんそうした情報も歴史を学ぶ上では欠かせないものであり、積極的に知るべきであると思う。しかし、今私たちがとるべき方法は、戦争を通して感じたことを個人レベルで聞いていくことであると思う。なぜなら、戦争といっても、実際に戦うのはひとりひとりの人間であるからだ。よく、「何万人亡くなった」とか、「戦艦大和が沈んだ」といった情報で戦争の悲惨さを伝える場面を目にするが、何万人のすべてに一つの人生があり、大和にも多くの人間とそれぞれの人生があったのだ。戦争の悲惨さを正しく理解するには、そうした一人の「人間」を対象にみていく必要があると思う。また、個人に聞くことは、戦争を体験した人からより多くの意見を得ることができるという意味でも重要である。今回の調査を通して、戦争をいかに感じるかは、個人レベルで変わること分かった。例えば、年齢の違いで戦争の体験の仕方も変わるし、立場の違い、性別の違いによっても異なり、それぞれが戦争に対してそれぞれの感じ方をするだろう。同じ出来事が起きても、立場の違いによって感じ方は異なるかもしれない。そうした情報を広く収集していき、よりリアルな戦争をとらえていくことが大事であり、早急に取り掛かるべきであると思った。／今回の聞き取り調査に協力して下さった方は80代・90代ほどの方で、島で戦争を語り継ぐ活動をされていた方であった。しかし高齢化によりその活動もできなくなってしまったという。そのことを聞き、戦争の体験を直接聞くことができるのは今だけだと感じた。あと10年、20年すると体験者から直接お話を伺えなくなってしまう。そのため、お話を伺うことができる今にできるだけ聞いておくべきだと思った。戦跡調査で掩体壕、富山丸慰霊碑、山小学校、戦艦大和慰霊碑、塹壕などを調査した。戦艦大和や富山丸のような慰霊碑が建てられている場所は戦争関連遺跡だとわかりやすく、人々の間でも話が伝えられやすいと思う。しかし掩体壕などは、それが戦争に関連するものだと説明されないとわからない。戦争体験者が減ってきている今、戦争があったことを伝える戦争関連遺跡は重要になってきていると考える。残すべき関連遺跡を保護し、伝えていくことが必要だと思った。／戦争にかかわる記憶の調査は難しい部分も多いと今回の調査を通して感じることも多くあった。しかしながら、戦争がどのようなものかということについては、今回のように自分で戦争遺跡を目にしたり、聞き取り調査を行うことでわかることも多いと考える。戦争を体験された方からのお話しは、教科書などで学ぶことよりも戦争の悲惨さを知ることができた。戦争に対する知識はある程度は自分にあるものだと考えていたが、聞き取り調査を行っていく中で、理解できない部分も多くあり、自分の勉強不足ということもあるが、自分が実際に体験したことではない戦争というものの記憶を調査する難しさを感じた。戦争に関する記憶を調査するということは大事なことであり、戦争を理解することへもつながると考えるため、今後も行なっていく必要があると考える。

②戦争を体験したことのない自分が記憶や経験を継承していく具体的な方法やアイデアをあげてください。

戦争を体験したことのない自分が記憶や経験を継承していく具体的な方法やアイデアとしては、今回のように戦争の記憶に関する調査の機会を設けることだと考える。今回自分は調査する側として参加したが、今回の〇〇さんのように戦争の記憶について語る人と戦争の記憶について調査する人を結びつけるような役割を今後になっていくことができるようになりたいと感

じた。また、今回の△△さんのように実際に戦争を体験していなくても語り部となるような機会も今後出てくることが考えられるので、その際には戦争は二度としてはならないという考えから展開していくのではなく、今回のお話の中であった遊びの話を導入にもってきて、戦争を二度としてはならないという考えに帰納するような話が必要だと考える。／現在、戦後 76 年となり、すでに戦争を体験した人の多くが亡くなっているように、戦争の情報を残していく点では大きな転換期となっている。私たちができるだけ早急に行うべきことは、まだ世に出ていない情報や記録として残っていない情報を記録に残すことである。記録を残す方法のうち、私たちが今できる方法で最も望ましいものは聞き取り調査であると思う。なぜなら、聞き取りを行うことで、実際にその人が体験したことに加え、その時に感じたことを知ることでもできると考えるからである。その時に感じた思いは、体験した人にしか分からないものであり、私たちに「戦争の何たるか」をよりリアルに教えてくれる貴重な意見である。確かに、効率よく調査を進めるという点ではアンケート等を行うことも方法の一つにあるかもしれないが、事実を知るだけでなく、その時持った感情を細かく知るためには、実際に面と向かったコミュニケーションの中で話してもらい必要があるだろう。現在ではリモートシステム等も普及し、以前よりも簡単に話を聞くことのできる方法は増えてきていると思うので、そうした方法を取り入れて効率よく確実に情報を記録していくこともできるだろう。注意する点として、異なる立場・性別・年齢の人に幅広く聞いていくことを挙げる。現在、戦争体験談として紹介されるものの多くが兵隊や軍関係者によるものであると思うが、実際には内地でも食糧不足等の問題で多くの人々が苦しんでおり、より戦争の実態を正しく把握するには、戦闘以外に生じた様々な問題に関わる体験談を集めていく必要があると思うし、立場の違いによって生じた意見・感情の違いも情報の 1 つとして重要であるだろう。／戦争の記憶や経験を継承していく方法として、戦争体験者のお話を語り継ぐことや本にまとめて残すことなどがある。しかし、人から聞き伝えた話や文章になっているお話だと、自分たちとは関係のないどこか遠い場所の話のように感じてしまい、戦争の記憶の継承としては不十分であるように思う。そこで戦争のお話に加えて、戦争遺跡を保護・活用することが必要だと考える。今回の調査で戦争遺跡を調査し、戦争遺跡は意外と身近な場所に残っていると感じた。こういった戦争遺跡を保存し、戦争遺跡に触れる機会をつくることで、自分たちの身近に戦争で使われたものが残っていると印象づけることができる。自分たちが生活している空間にかつての戦争で使われた・被害に遭ったものが残っていることは、決して戦争が自分たちとは遠い場所にあるものではないと伝えるものになるのではないかと考える。／戦争を経験したことのない私たちが記憶や経験を継承していくためには、自分のこととして想像してみるということが大事なのではないかと考える。戦時中の戦場や被爆についての話だけではなく、戦時中の日常の話を知ることが大事なのではないか。戦時中の日常を知ることによって今の私たちの日常と変わらない暮らしの部分を見つけることによって、戦争をあくまで他人事として考えるのではなく自分の事として考えることができれば、経験したことのない戦争の記憶を継承していくことも難しくないと私は考える。貴重な話を聞くことができても他人事として捉えてしまうとなかなか戦争の記憶や経験を継承していくということは難しい。そして自分で見たり聞いたりすることも重要であると考え。媒体を通して見るだけではわからないことも多くあると今回の調査を通して感じた。自ら戦争遺跡などを見に行くということもひとつの方法であると考え。興味を持ってもらうためにも、今回行ったような聞き取り調査などから、戦時中や戦後の日常を知ってもらい、自分事として考えてもらうことが重要であると私は考える。

③島の文化・自然遺産を大切に守り伝えるために現代のわたしたちができることについて意見を述べてください。

島の文化・自然遺産を大切に守り伝えるために現代のわたしたちができることについては、今回のように交流の機会を持つことが大切だと考える。百聞は一見に如かずということわざにあるように、今回実際に現地を訪れたことで島の文化・自然遺産について実感を持って知ることができ、守り伝えていくことの重要性について理解することができた。また、島出身の自分自身としては、一度島を離れてみるのが重要だと感じた。地域おこし協力隊の□□さんのように、一度島を離れてみることで気づく島の良さというものもあり、島の良さに気づいて最初から残る選択ができることももちろん素晴らしいことだが、一度出たことで島外の人の視点も持ち合わせることができ、島を開けたものにしていけると考える。／島は他地域と海で隔てら

れているため、独自の文化をはぐくみ、保ってきた。しかし、それは同時に島外の人々の島に対する関心や興味を得ることができて、その後簡単に訪れることが難しいというデメリットにもなりうる。現代社会において島の伝統文化を守っていくことは、外部からの接触を遮断し、全く手つかずの状態を保つのではなく、積極的に多くの人に知ってもらい、肌身で感じてもらうことで可能となると考える。これまで、島に古くから残る伝統文化が現代まで伝えられてきていることは、島の人々が大事に受け継いできた結果であるだろう。しかし、現代の人口減少と島外への人材流出という社会状況の中で、島民だけで伝統をつないでいくことは困難であり、その状況は今後加速していくことが予想される。そのため、島民だけでなく、本土の人々の協力も得た対策が必要であり、同時に後世につないでいくために、若者が主体となった活動も大事になってくると考える。一つの方法として、インターネットを使った情報発信を挙げる。伝統文化の保護の前提として、まずは多くの人に存在を知ってもらう必要がある。例えば徳之島を例に挙げると、島の特色の一つである闘牛がある。これは日本本土ではなかなか見られない文化でありながら、その存在をなかなか知られることが難しく、私自身そもそも日本に闘牛の文化があるイメージがあまりなく、外国の文化であるという印象があった。しかし、その迫力はすさまじいものであり、また戦術面の複雑さや独特なルールなど、一度見たらまた見たいと思わせるような一つのエンターテインメントであるといえる。ただし、これらに興味を持ったとしても、現地に行かなければ観戦することは難しいのが現状であり、人々の興味を持続的に持たせづらい状況である。そこで、現代のリアルタイム配信の機能を使った情報発信を方法の一つとして挙げる。現代では、若者を中心にユーチューブやインスタグラム、ツイッター等の SNS が普及しており、それらのリアルタイム配信の機能を使うことで、島外民でも手軽に闘牛を観戦することが可能となろう。また、より島を身近に感じることができて、これまでよりも新しいイメージを持つことができるだろう。そうした方法を用いることで、島外民も主体となった伝統の保護につながるのではないかと考える。／島の文化・自然遺産を守り伝えるためには、まず島にどのような文化・自然遺産があるのかを広めることが必要であると考え。島に遺産があることを広め、関心を集めることで遺産の保護につながると考えるからである。遺産の存在が知られて、島内外からの関心を集めれば保護や整備はおこなわれるであろう。またその地域の重要な遺産となり、観光地化などが進むと、そこにある文化・自然を守る制度の整備なども進むのではないかと考える。さらに、次世代の子ども達が文化・自然遺産に触れる機会をつくることも、島の文化・自然遺産を守り伝えることにつながると考える。特にその島の子ども達が島の文化・自然遺産に触れて、その遺産の価値や意義を学ぶことで、遺産を守ろうとする意識が生まれると考える。／島の文化や自然遺産を守り続けるために必要なことは、まず知ってもらうことであると考え。正しい知識と認識を持って行動していくことが重要である。その島だけの文化や自然遺産と考えるのではなく、島に住んでいる人、その島を訪れる旅行者、研究者など、私たちみんなに責任はあると考える。島の文化や自然遺産を守るために知ってもらうと言っても、機会がないとなかなか難しい。そのため、私たちのような若い世代の人に伝えるためには、SNS を上手く利用することがひとつの方法としてあるのではないかと私は考える。インスタグラムなどを活用することによって、島の文化や自然遺産を伝え興味を持ってもらうということであれば、私たちにもできることではないかと考える。

おわりに

2020～2021 年度にかけて、徳之島における文化・自然遺産の現地調査を行った。2021 年 7 月に世界自然遺産に徳之島が登録されたことから、登録前後の変化も現地で実感した。今回の調査では、徳之島の文化・自然遺産を複合的なものとして捉え、多様な立場（文化財専門職員、エコツアーガイド、地域おこし協力隊など）や方法で関わる方々の実践活動や思いについて直接お話を聞く機会を得た。徳之島に残るアジア太平洋戦争の痕跡についても、一般的な観光では見過ごされてしまいがちだが、意識するとそこかしこに存在することが分かる。また、現地で継続して行われている戦争の記憶をつなぐ活動についても理解を深めることができた。

今回の調査に参加した多くの学生にとって鹿児島県の島嶼を訪れるのは初めての経験であった。参加学

生の1人は島嶼出身者であるが、徳之島と比較したり、多様な活動をする人と接したりすることで、自分の生まれ育った島を相対化する視点を得たようである。限られた日数のため十分に見て回ることはできなかったが、「徳之島のことが好きになりました。もっと色々なことが知りたいから、また来ます！」という学生の反応はとても嬉しかった。大学の実習で島嶼を訪れることは、学生が島嶼と関わる契機を提供する重要な機会である。今後も島嶼での活動を続けていきたい。

新型コロナウイルス感染症との関係で、今年度も計画策定や現地調査の実施が難航し、度重なる予定変更を余儀なくされた。事前・事後の合同ゼミも、その時々々の状況を考慮して、対面とオンラインを組み合わせる柔軟に実施した。意見交換や情報整理はオンラインでもある程度は実施可能であるが、資料収集やより深いレベルでの議論は難しいことも多かった。なによりも、現地に行かなければ分からないこと、見えないこと、気づかないことはたくさんある。現地でフィールドワークを実施する意義についても改めて考えさせられた。対面での活動が制約される状況下におけるフィールドワークの記録として書き留めておく。

謝辞

本調査の実施にあたり、資料や情報提供などで下記の諸氏、諸機関ほか多くの方のご協力をいただきました。末筆ながら記して感謝申し上げます。プライバシー保護のためお名前こそ出せませんが、調査に協力していただいた話者のみなさまに御礼申し上げます。

天城町教育委員会、具志堅亮、常加奈子、中尾綾那、日高亜佑美、福添美優、福本慶太、與嶺友紀也（五十音順・敬称略）

参考文献

- 浅間集落誌編纂委員会編 2006『浅間集落誌』, 天城町浅間集落。
 天城町教育委員会 2020『知られざる幻の特攻中継基地 浅間陸軍飛行場から飛び立った特攻隊員』(配布資料)。
 天城町戦後 70 周年記念誌編纂委員会 2016『写真で見る戦時下の徳之島～天城町を中心にして～』, 天城町企画課。
 天城町文化遺産データベース (<https://jmapps.ne.jp/amagi/index.html>) [最終閲覧日: 2022 年 1 月 25 日]
 天城町役場編 1978『天城町誌』, 天城町。
 石田智子 2017『奄美大島瀬戸内町における戦争関連遺跡の考古学調査』『南九州・南西諸島を舞台とした地域中核人材育成を目指す新人文社会系教育プログラムの構築』平成 28 年度教育研究活動(プロジェクト等)概算要求事項報告書, 鹿児島大学法文学部・人文社会科学研究科, pp.101-122。
 石田智子 2021『徳之島における文化遺産の現状調査』『令和 2 年度「世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローバル教育研究拠点の形成」報告書』, 鹿児島大学法文学部, pp.13-21。
 石田智子・兼城糸絵 2019『奄美大島の戦争をめぐる「記憶」の記録と継承—考古学と文化人類学の共同研究—』『南九州・南西諸島を舞台とした地域中核人材育成を目指す新人文社会系教育プログラムの構築』平成 30 年度教育研究活動(プロジェクト等)概算要求事項報告書, 鹿児島大学法文学部・人文社会科学研究科, pp.40-53。
 石田智子・兼城糸絵 2020『鹿児島島の戦争をめぐる「記憶」の記録と継承—考古学と文化人類学の共同研究—』『南九州・南西諸島を舞台とした地域中核人材育成を目指す新人文社会系教育プログラムの構築』令和元年度教育研究活動(プロジェクト等)概算要求事項報告書, 鹿児島大学法文学部・人文社会科学研究科, pp.45-66。
 益田宗児 2019『徳之島特攻隊物語』, 浪速社。
 渡辺芳郎・石田智子 2018『地域自治体との連携による文化財調査』『南九州・南西諸島を舞台とした地域中核人材育成を目指す新人文社会系教育プログラムの構築』平成29年度教育研究活動(プロジェクト等)概算要求事項報告書, 鹿児島大学法文学部・人文社会科学研究科, pp.89-109。



コロナ禍の集合写真（犬田布岬にて）